
銀盤奮闘記

左藤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀盤奮闘記

【Nコード】

N9856T

【作者名】

左藤

【あらすじ】

フィギュアスケーター、キノハラ リョウヘイ紀野原亮平、19歳。目標はトリプルアクセルを跳ぶこと、そして、全日本選手権に出場すること。

良く分からんコーチやら鼻持ちならないライバルやら気の強い幼馴染やらに翻弄されつつ練習に励んだりどうでもいいことに気がそれたりする日常の中で、亮平の挑戦は続く。

ブログ：2012年、秋

シャアアッ！

鋭い音がすぐ脇をすり抜ける。続けてジャツ、ガツという大きな音が響いた。僕はその音を目で追いかけて、何とも言えない、嫉妬と憧憬と、少しの虚しさを混ぜ合わせたような思いに囚われる。それは僕にはまだ手の届かないものを見た、一種の羨望でもある。

「集中しろ」

声をかけられ、僕ははっと我に返った。

「大事な試合なんだぞ。そんなことでどうする」

「はい」

「いいか、今度こそ、あの野郎に一泡吹かせるんだ」

「はい」

何てこと言うんだこの人はと内心つつこむが、場内に流れたアナウンスに会話は途切れた。六分間の練習の終了を告げる。

『18番、キノハラ リョウヘイ紀野原亮平さん、北城大学』

続いたアナウンスに、僕の気持ちは引き締まる。緊張。張り詰めた糸。最後までもたせなければならぬ。

「よし、行ってこい。暴れまくれ」

コーチの言葉に頷き、中央へ。リンクの中央。冷たい空気。静かな集中。足元から伝わる氷の感触。

今日は東日本フィギュアスケート選手権の最終日、男子フリースケーティング。その名のとおり東日本全域のトップスケーターが集まる大会であり、今やスケート大国となった日本の最強のスケーターが集合する全日本フィギュアスケート選手権への参加が掛かった、大事な試合だ。

そして今日の僕にとっては、その全日本選手権に初出場できるかどうか、そして、ある『挑戦』を達成できるかという、特別な日である。

一息深呼吸し、スタートのポーズをとる。一瞬の間。音楽が流れる。

『ワルシャワ・コンチエルト』。

とある映画のために書き下ろされたこの曲は、重厚なオーケストラとピアノによる協奏曲。管弦楽とピアノが折り重なるような冒頭部は特に有名で、何となく知っている、という人も多い。ただ僕がこの曲を選んだのは、単に憧れのスケーターが昔使っていたからだったりする。

すぐにジャンプが来る。

最初のジャンプ。トリプルルッツ。左足バックインサイドエッジの助走。タイミングを計り右のトウを――

——突く！

すぐさま腕と脚を畳む。空中で三回転。刹那流れる風景。
着氷。右足に衝撃。心地よい流れの感触がブレードから伝わる。
やっぱりジャンプは最高！

もう一つジャンプが続く。軽くステップを踏む。再び加速。
トリプルトゥループ。軽やかに降り、そのままダブルトゥループ
のコンビネーション。観客の拍手が聞こえる。

一瞬安心するも、すぐに気持ちを切り替える。

次の要素はチェンジフットシットスピン。

バックアウトで回転に入り、すぐさまシットポジションへ。回転
を数え、フォアインサイドにチェンジエッジ。脚を代える。上半身
を抱え込むポジションから、上体を捻るポジションへ。

これも良い流れ。このまま行ければ――

繋ぎにイーグルを入れ、そのままりnkの外周を使ってバックク
ロスでスピードを出す。勢いと、それを殺さないタイミング。それ
だけを念じながら、助走に入る。

右足のバックアウトサイド。タイミング、タイミング…。

意を決して左足フォアアウトに足を代える。タイミング。極限ま
で張り詰める糸。つま先に体重を乗せジャッ、という音と共にその

まま跳び上がる。

——しまった！

跳び上がったから、僕は全てが手遅れだと知る。わずかにずれたタイミング。必死に体を締めて回転するも、徐々に歪んでいく回転軸……。緊張の糸が——切れた。

回転、仕切れない。

不完全な横向きで着氷した僕は、ジャンプの勢いそのままに氷に弾かれ、無様に倒れこんだ。混乱する僕は、眼前に迫ったリンクサイドのボードに手を付き立ち上がるも、次にどちらに滑り出せばいいのかも分からない。それでもプログラムを途切れさせるわけにはいかず、どうにか滑り出す。

すぐに次のジャンプが待っている。そんなわずかな時間の中で、しかし僕が考えていたことは一つだけだった。

僕が自分に課した『挑戦』。それは、今のジャンプを決めることだった。

トリプルアクセル。

誰もが聞いたことがあるはずだ。世界を狙うには必須の技であり、

これを跳べるか跳べないかだけでもキャリアが分かれてしまうほどの高難度ジャンプ。そして、スケーターを目指す子供たちには憧れであり、一度は跳んでみたいジャンプでもある。もちろん小さい頃の僕も例外ではなく、長年の練習の末、今年の夏ようやく、跳べるようになった。

何としてもこの大会でトリプルアクセルを成功させ、全日本選手権に出たかった。しかし、転倒。

ごちゃごちゃになった頭のままで滑り出した僕は、もう何も出来なくなっていた。その後のジャンプはすっぱ抜け、転倒の連続。

今年の東日本選手権の結果は13位。キス&クライで僕は乾いた笑いを漏らした。

これを笑わずにいられるか。

なんといつても、何度目か分からないくらいの挑戦である全日本選手権の初出場を、今年もまた見事逃してしまったのだから。

ブログ：2012年、秋（後書き）

えせスケオタのくせに勢いで書き始めてしまいました。
需要あるか不明ですが楽しんでいただければ幸いです。

ルールとかいまいち良く分かって無い中で書いてますので、ところどころ変かもしれませんが。

また今後の展開をあまり考えていない＆私生活が忙しくなったりするので、更新が滞るかもしれませんが、ご了承ください…。

<追記>早速微修正…。

<さらに追記>思いっきり勘違いしてた部分を修正…。

第一章：2013年、夏（1）

『やる気無いんじゃないのか？』

試合終了後に、あいつが言った。

何を言う、僕は真剣にやってる。言い返そうとしたが悔しさにまみれ言葉にならない。僕は練習のときからあいつを見ていた。六分間練習終了間際、わざわざ僕の横を滑りぬけてトリプルアクセルを決めて見せた、鼻持ちなら無いあの野郎。

あの野郎、だなんて誰かさんの影響を受けすぎかもしれないが、それが僕の中でのあいつの評価であることも変わらない。

ちなみにあいつは実際に本番でトリプルアクセルを決めて見せし、表彰台にも上って全日本選手権の出場を決めた。

そして僕の演技について、こんなことをのたまった。

『はつきり言って、くだらないよ』

- -

「なんだとおう！」

思わず大声を出して起き上がると、白いカーテンの隙間からやわらかい朝日が漏れていた。見回すと、そこは自宅の、自室。どうやらまた夢を見ていたらしい。

東日本選手権で惨憺たる結果に終わったのは、もう半年以上も前のことだ。にもかかわらず未だに夢に見るとは、我ながら情け無いというか何と言うか。

「おい、どうしたんだ大声出して」

「あ…なんでもない」

「そうか。朝飯、早くしろよ」

ドアの向こうからの声に答える。そうだった、今日の当番は僕だ。思い出したように漏れた欠伸を噛み殺し、パジャマのまま立ち上がる。

時刻は午前七時。急がねば。

僕の家は、3LDKの普通のアパートだ。そこで父との二人暮らし。生活にはまあ、服もご飯も電気も水道もガスも滞りはなく、困っていない。家事は二人で交代でこなし、その後父は仕事へ、僕は大学へ行く。

「
…」
「
…」
「
…」

黙々と僕が準備した朝食を二人で食べる。これは決して仲が悪いとかではない。

「
…」

美味い。

「
…」
「
…」
「
…」

「…今日の練習は？」

「午後の講義が終わってからすぐ行く」

「そうか」

「
…」

断じて仲が悪いわけではない。ただ単に、二人ともこういう会話が苦手なだけだ。まったく、家でなけりや普通に会話できるのに。

てきばきと二人で片付けて、食器を洗い、僕は部屋へ行き着替える。

僕が通う北城大学^{ほぐじょう}は、北海道で唯一、大学内にリンクを持っている。なので道内を拠点にするスケーターの多くは、ここに進学する。僕も昨年の春からここに通う、列記とした大学二年生だ。

学校へはバスで通う。札幌市近郊の田園地帯にキャンパスを構える北城大は、僕の家から約四十分。どちらかといえば近い。田んぼ

の中に鎮座する建物群はそれはそれで異様ではあるが、多分、土地の広さとか値段とか色々あったのだらうと僕は勝手に想像している。

はつきり言つて、僕は勉強があまり好きではない。高校にも大学にもスポーツ推薦で入学している身なのだから、ある意味当然かもしれない、と無理やり納得している。

午前中は文学の講義。右から左へ。午後には政治・経済が入るが、左から右へ。

僕の興味はほとんどスケートと映画のどちらかに振り分けられているので、もう他のものが入る余地はあまり無い。

講義をどうにかこなした後は、その足で敷地内のリンクへ向かう。もちろん練習のためだ。

フィギュアスケーターは、ほぼ練習漬けの毎日である。

僕の場合は講義が終わった後、午後四時ごろから八時過ぎまでのおおよそ四時間、試合が近づくと講義を休みさらに二時間ほど練習する。それがシーズンオフのわずかな休みを除いて一年間ずっと続くわけだ。

もちろん練習と言っても、ただ滑って跳ぶわけじゃない。吐き気がするほどのランニング、うんざりするほどの筋トレ、無酸素運動など、死にたくなるような陸トレメニユーが盛りだくさんだ。

人間やれば出来るんだなあ…。

でもまあこれは一番大変な時期であって、今日の練習は普通の氷の上で滑ること。

でも一口に氷の上を滑る…と言っても、さらにその中で色々やることがあるわけで。スピンのステップにジャンプ。しかもそれぞれがまた色々分かれる。

例えばスピン。ただ単にスピンと言っても、膝を折って座ったような姿勢になるシットスピン、上体と片足を氷と水平に伸ばした状態で回るキャメルスピン、立ち上がった体勢のアップライトスピン、背中と足をそらすレイバックスピン、さらにそのバリエーションが目が回るほどある。

競技で使うには、試行錯誤して様々な組み合わせを練習しなければならない。スピンの好きじゃない僕は練習しすぎると本当に目が回ったりする。

ステップ。もうこれに関しては言い切れない。ロッカーターン、カウンタートーン、ツイズル、トウステップ…気が変になりそうなくらいのフットワークの数々。競技会ではそれらを複雑に組み合わせ、しかも音に合わせつつ踏みながら、さらに上半身は大きく動かして音楽を表現する。

油断するとステップだけでへ口へ口になる。

最後は何と言ってもジャンプ。僕が競技で取り組んでいるのは六種類ある三回転^{トリプル}ジャンプを全て入れることだ。もちろん全て練習するし、コンビネーションの組み合わせ方も無数にある。世界レベルの選手になるとこの他に複数種類の四回転^{クワドラル}まで入ってくる。

それにトリプル以上のジャンプになると、耳元で風を切る音が聞こえるくらいの速度でジャンプに入っていくものだから、転んだときの衝撃も並じゃない。凄く痛い。場合によっては骨がボツキリとイッてしまうこともある。

僕も中学時代に転んで左手の指を強打し、骨折したことがある。練習を三日休んだ。

スケート選手って楽々やってるように見えても結構超人集団なんだよ？

そしてフィギュアスケートを語る上で欠かすことの出来ないのは、コーチの存在。一人で練習していると気づかない点というものが多々ある。

スピンのレベルが取れているかどうか、深いエッジでステップを踏めているか、ジャンプのタイミングや軸がずれていないか。そういう諸々の要素について、選手を見守り、改善点を指摘し、どうすれば良いのか指示を与える。

それがコーチ。

僕のコーチは北城大のリンクを拠点に指導しているので、僕は毎

日コーチの指示の元に練習に励むことが出来る。

「違う！ お前、耳付いてんのか？ 俺の話聞いてたのか？ 何なら頭かち割って直接脳みそに書き込んでやるぞ」

ちよつと心が折れそうだが。

どのヤ。ザ？ というこの男が僕のコーチ。

口調もさることながら、見た目もごついしでかいし、顔も怖いし、全体的に無駄に質量がある。どう見てもコーチというよりどっかの企業舎弟の親分です。

そんな見た目だが、意外なことにコーチとしての実績はそこそこであり、過去に国際大会で入賞した教え子もいる。

僕も何度か会ったことがあるが、初めてその人に会ったとき、可哀想な生き物を見る目で、搾り出すように「……めげるなよ」と言われた。

うん、今ならその気持ちも良く分かります（遠い目）。

「そんなところに転がってないで、とつと体を動かせ」

ステップでけつつまづいて大の字になった僕に容赦なく叱責が跳ぶ。鬼め。

「今何か言ったか」

「ん？ 何も言っていないけど？」

どこか納得できていない顔のコーチだが、そんなことに構わず僕も涼しい顔で練習再開。もう慣れたもんだ。

その後もあだこうだと言ったり言われたりで練習を続け、周囲のリンクメイトから生暖かい諦めの視線を向けられつつも、コーチの腹いせのつもりなのかいつもよりも苛烈気味のメニューをこなした。

日が長くなつた今の時期でもほぼ外は真っ暗と言うくらいの頃、ようやく開放される。

僕はもう歩くのも億劫というくらい疲れきっていたわけだが、コーチの方はざまあ見ろといった様子でニヤニヤ笑っていたりする。どこの小学生だ。

「もっとまじめに練習することだな」

「その笑顔、どういうわけか凄く腹立つんですけど」

「んなこたあ分かってる」

「最低だ」

「褒めても何も出ないぜ」

我ながら変わった関係の師弟ではあると思うが、いつの間にかこうなってしまったのだから仕方が無い。信頼の一つの変化形ということにしておこう。

よばよぼした足取りで僕はロッカールームに向かう。僕まだ十代なのに…。

「おい、ちょっと待て亮平」

そこでえらく真面目な顔のコーチに呼び止められた。

何だ、まだ何かあるのか。げんなりした僕に、コーチは神妙な顔で当たり前のように言った。

「今日の晩飯は、カレーが食いたいな」

僕はため息をついて「リョーカイ」とつぶやくと、フラフラと歸路についた。これが僕のコーチかつ義理の父でもある嵯峨洋次郎サガ ヨウジロウであり、僕の日常なのだった。

第一章：2013年、夏（1）（後書き）

相変わらずの誰得小説ぶり。

第一章：2013年、夏（2）

さて、僕が通う北城大学だけど、もちろん他にも何人ものスケーターがいる。そして大学内にリンクがあるくらいだから、当然世界レベルの選手を何人も輩出している。スター選手だっているし、リンクには往年の名選手が描かれた垂れ幕が掛かっていたりする。

現役の選手にしても、グランプリシリーズの優勝者だったり、世界選手権のメダリストだったり、普通練習している。

それに混じって僕も練習しているわけだけど、そういったトップ選手たちと、僕のようなアレな選手の間に溝があるかと言うと、そうでもない。

まあ確かに実力には差が開いてしまったけど、スケートリンクの数に限りがあるため、選手たちは皆子供の頃から……つまり実績も何もない頃から知り合いなわけで、普通に幼馴染として一緒に育ったような感じだったりする。それにジュニアの下ノビの頃から、スケート連盟の強化合宿に参加している関係で、ほとんどの選手が最低でも顔見知り、気の合う選手も多く、シニアになった今でもそれなりに続いている。

大学での練習に関しても、上手い奴の様子を見ると「くそー（orz）」みたいにはなるけど、それで仲が悪くなるということはなく、普通に遠慮なくそれを言える程度には、仲の良い選手ばかりだった。

だが気の置けない仲というのは、それはそれで良かったり悪かったりするものである。

「亮平！ 亮平ー！ リョー…長いわね、ヘタレ！ おいヘタレー！ どこだヘタレ！」

ロッカールームのドアの向こうから何やら変な声が聞こえ、僕はため息を押し殺した。

「あー、うん、ドア一枚向こうにいるわけだから叫ばなくても聞こえるんだけど、たった二文字短縮するためだけに根拠もなく変な言葉を代名詞にしないでね？」

「根拠ならあるじゃない。目をしっかり開けて、鏡を見て、十秒そのままにして。…ほら、どこからどう見ても立派なヘタレがそこに！」

「立派とヘタレって意味が矛盾してるよね？ 全く意味が分からない。分かりたくない」

「脳細胞が足りないところもヘタレ」

「ろくでもない言葉ばかり垂れ流す脳細胞は要らない」

僕と毒を吐きあっているのは、僕と同年の選手。いわゆる幼馴染だ。しかし、どちらかというと、困った部類に入る幼馴染である。

まず、口が悪い。どんな育ち方をしたのか気になるくらい…というか僕が見る限り普通に育っているはずんだけど、口が悪い。

そして言い返すためには相対的に僕の口も悪くなるわけだが、これがまた分が悪い。

なぜなら、この幼馴染は厄介なことに、どこからどう見ても美少

女だからである。どちらかといえば小柄だが、黒い髪、大きな目、整った唇に、滑らかな肌。美少女である。小さな頃はあまり気にならないが、この年になると僕も男の子なので、色々思うところがある。

何より、整った顔を近づけられると、無駄に圧力を感じてしまうのは男の子の特性上仕方ないことだと思います。

そして、彼女に関してもっとも厄介な事実――

「で、いつ帰ってきたの？」

「昨日。先生が何だかこだわっちゃって、予定より長引いたの。海外の振付師って芸術家肌なところあるし……」

「へえ」

「もう顔真っ赤にして気合入れるもんだから困っちゃったわよ。何があったのかは知らないけど、『絶対オリンピックで金メダル取れ！』だって。英語でまくし立てるもんだから疲れるわ。まあ、当然狙うけどさあ」

そう、僕の横でペラペラと毒を吐くこの美少女は、昨シーズンの全日本チャンピオン、そして三月に行なわれた世界選手権で初優勝を果たした、現世界女王、如月明乃キサラギ アキノその人なのだ。

美少女フィギュアスケート女王が幼馴染。聞く人が聞けば泣きながら僕を呪い殺してくれそうな関係だけど、口から出る言葉が全てを台無しにするのだった。

「で、あんたはどうなのよ？」

「は？」

「練習よ練習」

「ああ…」

何となく答えづらい。まあ、いまさら遠慮とかする仲でも無いんだけど、こと明乃とはあまりスケートの話はしない。

はつきり言って、明乃は女子選手ながら、僕より上手い。練習ではトリプルアクセルをぽんぽん跳んでいるし、競技会でも五種類のトリプルジャンプを安定して決めることが出来る。つまりルッツとフリップの跳び分けが出来る。これが難しい。

ルッツジャンプとフリップジャンプは、どちらも右足のつま先トゥを突き、左足で跳び上がるジャンプ。二つのジャンプの違いは、跳び上がる前の助走の仕方にある。ジャンプの回転する方向とは逆の軌道で助走するルッツは、跳び上がる際に左足が外側アウトサイドエッジに倒れた状態になる。

一方、前向きで助走して、跳ぶ直前にジャンプの回転と同じ方向にターンするフリップは、ターンするときの勢いをジャンプに利用する。その際左足は内側インサイドエッジに傾いた状態となる。

しかし似たようなジャンプだけあって、この二つの違いを出すのが難しい。どちらも同じような跳び方をしてしまうことが多いのだ。

ルッツなのに、跳び上がるときのエッジがインサイドだったり、フリップなのにアウトエッジだったり。間違ったエッジのジャンプにフルッツ、リップという通称が付いてしまうほど、多くの選手が

跳び分けに苦労している。

ちなみに僕はルッツが得意なので、フリップのエッジが怪しくなることがある。明乃はそのところを完璧に跳び分けるのだから、なかなか凄いやと言わざるを得ない。

さらに明乃が凄いのは、コンビネーションのセカンドジャンプにトリプルループを跳べることだ。

ちなみにセカンドジャンプに付けられるジャンプは、トゥループとループの二種類。ジャンプは全て右足で降りるので、続けて二つ目を跳ぶには、右足で跳び上がらなければならない。つまり右足踏切のジャンプであるトゥループとループのどちらかしが跳べないわけだ。

そしてトゥループはその名の通り、左足のつま先トゥを跳びあがる際の補助に使えるのに対し、ループは右足のみでそのまま跳び上がらなければならないので、格段に難度が上がる。

ダブルならまだしも、トリプルになると、一つ目のジャンプを完璧に降りられる自信がなければ二つ目にループを持って来ることはできない。男子ですら試合で跳ぶ選手はほとんどいない。当然僕も跳べない。

それを軽々試合で決めて見せるのだから、明乃は実は世界チャンピオンなだけあって凄い奴である。言ってることは意味分からのに。世界の半分は不条理で出来ています。

「何ぶつぶつ言ってるの？ もいであげようか？」

「段々言うことが生々しくなってるよね。っていつかもぐって何を？」

「…首とか？」

「もはやその発想が恐ろしいよ…！」

僕には出来ない発想です。

「で、練習は？」

「昨日は普通に練習した。一回トリプルアクセル降りた。帰ってからカレーを作るのが地味に面倒だった」

「何でカレー？」

「父さん…コーチがご所望で…」

「なるほど」

「で、僕も明日から振付」

「今回も嵯峨コーチが振付けろの？」

「うん、まあ…」

「なら安心、かな？」

見た目アレな僕の父だけど、どういうわけか振付も出来る。しかも外見に反して（失礼）優雅で流麗なプログラムを作ると評判であり、振付の依頼もちよくちよく入っている。

スケジュールを管理する僕の身にもなって欲しいなんて、別に思っ
つてないよ？

少ししか。

「まあいいわ。明日からあたしもここで練習するからね。浜名コーチもよろしくって言ってたから」

「ああー、うん…」

「ちゃんと嵯峨コーチにも言っといてね？」

ニヤリと笑う明乃。僕はと言うと、それを伝えたときの父の反応を考えると、何となく沈うつな気分になるのだった。

第一章：2013年、夏（2）（後書き）

美少女投入。

ちよつと説明が多いかもしれないと思ったり。読みづらかったらすみません。

<追記>ちよっぴり修正。

第一章：2013年、夏（3）

「で、どうするんだよ」

「…どうしよう」

僕が今いるのは、北城大学のアイススケート部の部室。スケートリンクの施設の中に組み込まれている部室は、二階にあるので日当たりが良く、いつもは明るい。ただ今日は外は土砂降り、当然部屋は暗い。

ゴロゴロピシャーンとかいう雷をバツクに二人で相談しているので、まるで良からぬ事でもたくらんでいる雰囲気だな、とかどうでもいい感想が浮かぶ。

「去年もピアノだったからな、ピアノの曲はもう良いんじゃないのか？」

「うーん、でもピアノ好きなんだよね。ピアノは楽器の王様だよ」

「お前が弾くわけじゃないだろう」

「好きな曲で滑りたいって、あるじゃん」

と言うわけで、今僕はコーチと、振付の打ち合わせ。新シーズンに向けたフリープログラムの曲選び。ショートはもう決まっていて、昨日から振付も始めているが、フリーはまだ幾つかの候補の中から選んでいる最中だ。

「この三曲のどれかだったら編曲も終わってる。すぐに振付に入れるぞ」

「うーん、でも…」

「はつきりしない奴だな」

でもピンと来ないんだから仕方ないじゃん。CDラジカセで曲を聴きながら、僕は首をかしげる。

用意されたのは、「リバーダンス」からのセレクション、ピアソラの「リベルタンゴ」、チャイコフスキーの「ヴァイオリン協奏曲」の三つ。どれも耳に馴染みがあって、しかも僕が滑ったことの無い曲ばかり。

悪くない選曲だとは思っただけど…。

「オーソドックス過ぎない？」

「つまりどれも良い曲ってことだろうが？」

そういう考え方もあるにはあるが。

「とりあえずもう少し考える」

「そうか…」

どこことなく残念そうなのは何故だ。面倒だからとかじゃないだろうな。

「そういえば」

「なんだ？」

「明乃から伝言。浜名先生がよろしくって」
「…」

むっつり。

「…聞いてる？」

「…あ、ああ、分かった」

はあ、まったくこのおっさんは…。

「とにかく、フリーはまた明日相談する」

「…そうだな」

「じゃあ、練習してくるから」

「ああ。俺がいないからって手を抜くなよ。分かってるだろうな？」

コーチはこの後別のリンクでジュニア選手の振付の依頼がある。
今日は一人で練習だ。

「りょーかい」

そう返すと、コーチ…父さんは何だか心もとない足取りで部屋を後にした。これだから面倒なんだよ…。今日の当番は父さんだけど、多分あの調子だと夕飯はカップ麺と冷凍ご飯で決まりだ。あー、焼きそば弁当残ってたかなあ。

まあ、今から気にしても仕方ない。それより、プログラム、何にしよう。

プログラム、特に競技用のプログラムになると、色々と制約が多い。

ショートプログラムは2分50秒以内。フリープログラムは4分30秒±10秒の間。さらに男女シングルとペアではボーカル曲は

禁止。正しは、歌詞入りの曲が禁止なので、歌詞の無いコーラスなどはOK。

これらを違反すると減点^{ディタクシヨン}-1となる。

大抵の場合は既存の曲を編集してそれにあわせるわけだけど、案外これが難しい。

だってプログラムの中でやることは決まっている。

フリーで言うならば、ジャンプが八つ、スピンの三つ、ステップが二つ、という具合に。

しかもジャンプの助走とか、スピンの回転数とか、ステップの要素とかを考え、なおかつ音楽と調和したプログラムを作るのだ。

時々上手くいかないことがある。スピンのレベルを取ろうと思ったら音楽とずれてしまったり。逆に音楽に合わせればレベルが取れなかったり。

女子だとスパイラルなんかで時間が足りないと得点にならなかったりもするし。

そんなこんなでスケーターや振付師は普段から、クラシック音楽や映画のサントラなんかを耳にすると、プログラムに合うかな？と条件反射的に考えることが多い。

お、この曲のこのフレーズでステップを踏むと盛り上がりそうじ

やね？　とか、あーこの曲のこことここを繋げればいい感じにまとまりそう…ってな具合に。

そうして選んだ曲を編集しつつ、コーチや振付師の先生と一緒に、プログラム構成を練っていく。

僕の場合はコーチと二人。技術的なことをまとめて話し合えるからこれはこれで良いんだよね。

でも今回に関しては、コーチの琴線と僕の琴線がちょっとずれてたってことなんだろう。

本当に満足のいくプログラムを作るのは簡単ではないのだ。

「ねえ、明乃は今シーズンのプログラム何にしたんだっけ」

「んー、シヨートはプッチーニの『トスカ』」

一足先に練習を終えた明乃にそれとなく尋ねた。重厚なメロディが頭に流れる。明乃にしては珍しい選曲だ。

「ま、一番好きなオペラだったから。好きな曲で滑りたかったし」

僕と同じようなこと言ってるな。

いやでもそれだけじゃないはずだ。絶対あの選手が五輪で使っていたのが主な理由に違いない。

ちなみに明乃憧れのあの選手とは、カウガールではなく、金パンツである。

「他は？」

「フリーは結構悩んだんだけど、ガーシュウインの『パリのアメリカ人』にしたわ」

「ああ、日本人がロシアで演じる『パリのアメリカ人』って良く分からんな」

「絶対言うつと思った」

ビュウオウ！ と飛来する拳。こわつ。っていつか女子選手で『パリのアメリカ人』ってそれも珍しいような。

「エキシビションは？」

「二つ作っただけ」

「へえ」

普通作としてもエキシビションは一つだ。ちなみに僕は作る予定は無い。エキシビションを滑る予定が無いんだから当然である（涙）。

「片方は『美女と野獣』のピアノアレンジね」

「おおっ」

「何その反応？」

べ、別に見た目は別にして中身はむしろ野獣？ とか、そんなことと思って無いんだからねっ！

「ごめん、燃やすわ。まるごと」

「ひい、すみませんごめんなさい丸焼きは勘弁してください」

…あれ、でももう一つのプログラムは何だ？

「秘密」

「秘密って…あ」

なるほど。僕は納得する。

何と言っても今年は四年に一度の特別なシーズンである。そして明乃は現世界チャンピオン。もちろん狙うは一つ。

「ま、願掛けってやつかしらね。ちょっとだけ言っと、ロシア人の曲。せつかくロシアでオリンピックあるってことでね…」

僕には遠すぎて全く実感とか無いんだけど、明乃は違う。もうその頂点に片手をかけてる。

五輪で滑るためだけに準備したプログラムがあるんだろう。それだけ本気で狙っているんだろう。

やっぱり遠いな。

何となく、僕はそんなことを思ってしまった。それに気付いたのか、明乃が変な顔をしていたけど、僕にはどうしてそんな顔をするのか分らない。

「…とりあえず、あんたはあんたの目標へがんばりなさい」
「うーん」

僕の目標なんて、些細なもんだ。

明乃はあきれたように、

「いいから、そこはとりあえず分かったって言いなさいよ」
「うい」

まったくもう、とため息を残して明乃は帰っていった。僕はリンクに一人残って、同じくため息を漏らした。

…とにかく練習はしよう。氷に乗れば、面倒なことは忘れられるかもしれないし。

プログラムについては今夜寝ながら考えればいいしね！

第一章：2013年、夏（3）（後書き）

一月ぶりになってしまいました。

<追記>またアホみたいな勘違いしてました…。

第一章：2013年、夏（4）

「ど、どうしてこうなった…」

「は？ 何か言った？」

日曜日。僕たちスケーターにとっては、貴重な貴重な休日である。僕の場合、その休日は映画を見るために費やされる。

映画は偉大だ。色んな世界へ行ける。

僕はスピルバーグやキャメロンやルーカスなんかの超人気監督はもちろんのこと、スコットとかデ・パルマみたいなああいう癖があったりダークな雰囲気がある映画も好きだ。『スター・ウォーズ』は当然ブルーレイ・ボックス買ったし、『ジュラシック・パーク』も大好きだ。『アンタツチャブル』も凄く良いよね。ちなみに『エイリアン』よりは『ブレードランナー』の方が好きだったりする。

そういえば、去年のフリーで使った『ワルシャワ・コンチエルト』。あれも映画の曲だったんだよねあ。

そこで僕は閃く。

やっぱりフリーはピアノが入った映画の曲がいいかも（結局決まってる）。今までプログラムの選曲は父さんにほとんど任せてたから、プログラムで映画の曲を使ったことは何度も無い。

どうして思いつかなかったんだろう。なんかパツとしないと思ったら、普通のクラシック曲なんて、僕らしくないってことじゃない

のか？ 映画、映画の曲。ピアノの入った曲ならなお良い。

これが天啓と言う奴か！

僕の思考が横道へそれたところで。

「あんだどこ見てんの？」

「…ああ、思わず現実逃避してたよ…」

「やっぱりバカなんだな、お前」

「バカなのよ、こいつ」

「うるさい…」

はい、何となくお察しのことと思いますが、今ここには明乃、それにもう一人別の人間がおります。んで、ここがどこなのかと申しますと、JR札幌駅の横。まあ、いわゆるJRタワーという所ですね、はい。

次、なんでせっかくの日曜日、家でゆっくりと映画を堪能するはずがこんなところにいるかと言っと。

昨夜遅く。

『明日十時にJRタワーのいつものとこね。来なかったら。x
(自主規制) だから』

という色気もへったくれも無いメールが明乃から送られてきたためである。

そんなわけのため息をつきつつ待ち合わせの場所に行く。

そうしたら、明乃と一緒に、こいつがいた。この松下翔太^{マツタ ショウタ}が。僕が嫌いな男ランキングベストワンの常連だ。

「まったく、せっかく久々の北海道だというのに、変なものが視界に入るんだけど。ちょうどそこに屑籠があるから捨てていいかな？」
「捨てるな」

「な、口答えした…だって？ まさか人語を操るとは…」

「お前の中の僕は一体のどんな生物なんだ…」
「むしろ無機物」

「…」

「相変わらず仲良いのね」

「「良くない」」

「Stk m4（シンクロナイズドつつこみレベル4）！ アイスダンスの選手も真っ青だわ」

もうどうでもいい…。っていうか僕の周りには口の悪い人間が多すぎるよね？

「「気のせいだ（よ）」」

んなわけあるか。どうしてこんな奴ばかり集まるんだ。

「「日ごろの行いのせいだ（よ）」」

…。

お前からこそアイスダンスやればいいよ。

「…で、なんでここにいるのさ」

「そりゃ、北城のリンクにトレーニングと振付。明石先生にね」

明石先生とは北城大学で活動しているベテラン、アカシ ヒロマサ明石浩正先生のことだ。

ひよろりとして眼鏡をかけた、年齢の割りにとても爽やかな人だ。ごろつきみたいな僕の父さんとは犬猿の仲、というか父さんが一方的に嫌っている。やっぱり小学生…。

そして、今僕の前に立つて、ふん、と鼻を鳴らしているこの男。

松下翔太、北陸のエンカ円霞大学二年生。

僕が嫌いな男だ。父さんと明石先生との違いは、互いに嫌いあっているってところかな。

そう、この男こそ、昨年の東日本選手権で僕にアーだこーだのたまってくれた、忌々しい男なのだ。

「そもそも何で僕がいなきゃいけないのさ」

「そりゃあ、男共は私の荷物持ちに決まってるじゃないの」

「だそうだ」

「…」

いや、まあ、分かってたけどさ。どうせ――

「久々に帰ってきたんだから時間あるうちにショッピングとか色々楽しんでおかないと！」

予想通り過ぎる理由です。本当にありが（ry

「俺は別に構わないよ。久々に来たし、少しは出かけようと思ってたから。ハエが一匹付いてきてるのが微妙だけど」

「素晴らしい例えだわ」

「ハエ…」

まあむしろ頭にハエがたかっている男の発言は放っておいて、僕たちが今いるＪＲタワー。ＪＲ札幌駅に隣接しているこのビルディングは、様々な店舗がひしめく大型商業施設だ。ただ様々な、とは言っても、二百万都市に迫ろうというこの札幌では、とりたてて珍しいというほどでもない。

だが駅に隣接しているだけあって、交通の便がよく、行きやすい。それに明乃のように中々時間の取れない人間にとっては、一つの建物で大概のものが揃うＪＲタワーのような場所は、とても都合がよい。

というわけで明乃からの呼び出しのほぼ二回に一回はこのＪＲタワーの正面玄関前になるのだ。

まあ、それは別にいい。だが。

「…おい、あれ…」

ざわ…。

「…ねえ、あの娘もしかして…」

ざわ…ざわ…。

「…ああ、フィギュアスケートの…」

ざわ…ざわ…ざわ…。

分かっていましたとも。

こうなることくらい分かっていましたとも。毎度のことですとも。

「それにしても、やっぱり凄いな」

翔太が言う。

「は？ 何が？ とにかく買い物行くわよ、荷物持ちたち」

「…これに気付かないのも凄いな」

「…確かに」

これは同意せざるを得ない。

何と驚くべきことに明乃は、これだけ衆目の視線を集めながらも、それに気付いたためしが全く無いのだ。

その分、僕の胃袋のほうは毎度毎度キリキリとダメージ蓄積されちゃうけどね！

…穴が開かないといいなあ。

「だから何がよ？」

というか、本人だけ気付いていないというこの状況は、いささか不公平なんじゃないだろうか。いや、明乃が悪いわけじゃないのは分かっていますよ。

でも鈍感力全開で鼻歌なんか歌いながら歩き出す明乃に、僕が何とも言えない残念な気持ちになるのは、まったくもって仕方の無いことだと思う。

僕はもう癖になってしまったため息をつき、スキップで天まで昇っていきそうな明乃の後を追った。

第一章：2013年、夏（4）（後書き）

買い物編はまだ続くらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9856t/>

銀盤奮闘記

2011年10月9日07時34分発行